校長室だより～燦燦～ №３９６

# 英語の授業

2021.7.26

初任者のＳＳ先生は、３年生の英語の授業を担当している。３年生には、もう一人の英語の先生がいる。彼女は、常に授業を工夫しようとしている。ＳＳ先生にとっては、大きな存在である。授業力における彼の現在地を確認するという意味もあって、彼女の授業を見ることも多い。

この前参観した彼女の英語の授業を振り返ってみる。黒板の脇には、大型テレビモニターがある。教卓には、ノートパソコンもある。前の時間には、２階の教室で、同じように大型テレビモニターとノートパソコンを使って授業をしていた。

それが、次の時間には、１階の教室で同様の授業が展開されていた。どんなことに感心したのかというと、たった１０分間の休み時間のうちに、大型テレビモニターとノートパソコンの準備を終えているという点である。日頃から使いこなしているのである。

たいていの人は、面倒くさいことはやりたがらないものである。それは教員でも同じである。彼女の場合は、当たり前のように準備し、当たり前のように使っている。生徒がタブレットを使う時代である。教員も、このくらいでないとだめなのだろう。

導入では、生徒が興味をもつような、生徒にとって身近な話題から、その時間に学習する英文をつくっていた。ノートパソコンを操作し、モニターを見せながら進めるので、テンポがよく無駄がない。

生徒に話し合わせたり、二人組で会話をさせたりと、活動がたくさんあった。振り返りの時間も確保されていた。書かせることで振り返りをさせていた。全体を通して、よく工夫されていた。それだけ、授業者が考えて授業をつくっていたということである。

生徒は、言われたことはやるのだが、彼女の授業に限らず、あまり楽しそうには英語を話してはいないように思える。もともと日本語さえ話すのが苦手なのだから、英語ならばなおさらだろうという考えもある。そうなのだろうか。自信がないということもある。大人でもそうである。

一番いいのは、英語を使わざるを得ない状況に追い込むことである。そのような設定にするのが通常の授業では難しい。そう考えると、ＡＬＴの存在は大きい。昨今は、オンライン、リモートの時代である。海外とも容易に結ぶことができる。生徒は、タブレットを使うことができるようになっている。海外の英語圏の人々との交流はできないものだろうか。そんなことも考えた。

いずれにせよ、私が受けた中学の授業とは、別物である。英語をマスターすることを考えれば、今の授業の方が格段によいだろう。このような授業であれば、もう少し、今の中学生が、英語力をつけてもいいような気がする。

また、英語の先生方が工夫している点から、他の教科の先生方が学ぶということも考えられる。やはり、他の教科の授業を見ることは、いい研修なのである。違った角度から授業のことを考えることができる。

彼女には、同じ学年を担当しているＳＳ先生のアドバイザーを務めながら、自分も成長していってほしいと思う。ＳＳ先生にとっては、最初に出会った“師”のようなものだろう。二人で３年生の英語力をどんどん伸ばしていってほしい。彼女の前向きなポジティブな姿勢は、きっと生徒にも、ＳＳ先生にも、よい影響を与えるものと思う。